

京都部落問題 研究資料センター通信

第8号

発行日 2007年7月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 部落史連続講座

京都の被差別部落と仕事

第1回

中世の被差別民と芸能

講師 村上紀夫さん

(大阪人権博物館)

報告 秋定 嘉和

二〇〇七年度の第一回部落史連続講座は、大阪人権博物館学芸員である村上紀夫さんに来ていただいた。

村上さんは、日本中・近世史(文化史)専攻である。論じて下さったのは「中世の被差別民と芸能」と題された内容で、まず中世非人の三分化から説明された。宿非人は「交通の要衝などにつくられた『宿』に集住」していた人々。ついで散所、「声聞師(唱門師)とも呼ばれ、宗教行為とともに祝福芸を行う」人々。さらに河原者で「河原に定住して皮革生産や土木事業、作庭などを行う」人々について述べられた。

さらにテーマにつながる「万歳」についてのべられ、万歳とは「太夫と才蔵の二人から数名が一組となり鼓を手に家々を訪れてはめでたい言葉とともに、一年の幸福を祈る祝福芸」で、「古くは千秋万歳と称していた」という。そしてその研究業績として、「身分制研究」の側から古典的著述として盛田嘉徳「千秋万歳の研究」(『中世賤民と雑芸能の研究』)があり、「芸能史研究」からは山路興造の「万歳の成立」(『翁の座』)があるという。

そして、村上氏は自己の研究について述べられ、「千秋万歳」の成立について、平安時代成立の『新猿楽記』にある「千秋万歳の酒袴」の記述や鎌倉期成立の辞書『名語記』の記載を紹介した。他に、梅津散所についての史料をとりあげられ、詳しく説明された。文禄から近世の万歳については、秀吉の声聞師の尾張への強制移住

や禁令、その後の秩序解体が述べられた。空白になった京都には大和万歳が参動するようになったとのことである。

その後、万歳は西日本各地(尾張、三河、大和、伊予)で盛行、土御門家による陰陽道支配のなかで民間宗教者も編成された。その際、万歳師も「通常は農業を行い年始のみ万歳」を行う場合と、「通常は陰陽道を行い、年始は万歳」を行う「兼職万歳」の場合に分かれた。

また、江戸の「三河万歳」にふれ、土御門家の支配をうけ、暮れに三河から江戸へ向い、檀家帳によつて江戸から各地の檀家をまわつたという。また、檀家まわりの万歳とは別に、「だいどこ万歳」と呼ばれるものもあったという。

そして、明治維新によつて陰陽道の廃止をうけ、三河万歳は明治一九年、万歳教会を結成、万歳師は神道教導職に、檀家は講社員となり今日でも細々と続いているという。

なお、手近な参考文献として、世界人権問題研究センター編『散所・声聞師・舞々の研究』(思文閣出版)があり、巻末の文献目録や年表が参考になるとされた。

(京都部落問題研究資料センター所長)

第2回
近世 仕事三大咄

国家公務員・委託事業・

芸能プロダクション

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

報告 中島 智枝子

二〇〇七年度連続講座の第二回は、「近世 仕事三大咄 国家公務員・委託事業・芸能プロダクション」と題して辻ミチ子さんを講師に迎えて六月一日に行われました。辻ミチ子さんには昨年度連続講座で、「京都の番組小学校と女紅場」と題して維新期から明治期の教育について講演をしていただいてあります。これに続いて、今年度は近世期の仕事についてお話をしていただくこととなりました。

まず、今回の演題について説明されました。タイトルに「三大咄」と表記されていますが、そのような大きな問題を取り扱ってお話するというのではなく、「三題咄」と表記したほうが適切であるという事です。また、サブタイトルの国家公務員・委託事業・芸能プロダクションというのは、近世期の被差別部落が従事していた仕事

を現代的な言葉で言い表したという事です。

平安時代の検非違使の下で清目役の仕事をしている人がいました。この仕事をしている人はその後も支配者の下で仕事をし、江戸期に入ると、京都は天領となり幕府所司代 町奉行という支配構造が作られ、清目役の仕事は町奉行所が統括する仕事となりました。したがって町奉行所の下でこの仕事に従事した人々は、幕府を国家と見立てると国家公務員にあたると言えます。どのような仕事かといえは下級警察官に相当する仕事であり、この仕事に従事したのは江戸時代ではかわた身分と非人身分に編成された人々であります。これらの人は直接町奉行所に従ったのではなく、町奉行所の下に置かれた四座雑色しざざうしきに統率されていました。

四座雑色ですが、京都独特のもので、室町期からみられ、「河原沙汰」といわれる治安維持の仕事を行っていました。四座雑色の下で使役された河原者が行った仕事は警刑吏役、犯罪人の処刑を行う断罪役でありました。その後、戦国期には戦国大名の下でもこの役は踏襲されました。江戸期に入り確立します。移行期にあたる時期に起

きたことですが、大坂城落城後豊臣頼の子国松の処刑に当たり、豊臣頼の側から喧々諤々の非難が上ったとき、国松ほどの身分だけに普通の人の手で処刑を行うのは恐れ多いということで「穢多」に行かせたと「武功雑記」には述べられています。

この時期になるとそれまで庄といっていたところが村となります。かわた身分は人口が少ないので一般村の枝村となりました。村と称されるようになった頃、京都では警刑吏役に従事する村を役人村とい、役人村には庄屋を置くことは認められず、年寄が置かれました。ここに、町奉行所 四座雑色 役人村という支配構造が形成されました。寛永年間(一六二四〜四三)から天部村出身の「かわた頭」である下村家が二条城掃除役を務めています。一七〇八年(宝永五)、下村家は断絶しました。これをきつかけに役人村が直接四座雑色の下で仕事をようになります。その後、六角に牢屋敷が出来た時、役人村はそこでの仕事を願い出て認められ、六角牢屋敷外番役を務めるようになります。遠隔のかわた村は役人村の統率下におかれ、実労働の代わりに役料を出しています。

一方、非人身分に編成された人々ですが、町奉行所 四座雑色 悲田院という支配構造の下に編成されました。悲田院があつた所は現在の岡崎の美術館あたりです。非人身分の中の主だったものを与次郎と呼び、その中の主だったものから年寄が四、五名選ばれ、また、与次郎の中から小屋頭が選ばれました。この小屋頭に非人身分の人々が統率され、警刑吏の仕事に従事しました。歌舞伎の「白波五人男」で一躍有名になった京都で捕まった強盗の日本左衛門の江戸送りの際の付き添い役に悲田院年寄、小屋頭が出ています。警刑吏の仕事のほかに、京都に入ってくる野非人の取り締まり、行き倒れ人の管理にあたっています。また、飢饉の際などに行われる施行も悲田院が中心になって行っています。さらに、江戸期の京都では辻々に公衆便所に当たる肥桶が設置されていました。これを管理するの悲田院でした。当時は糞尿は肥料として活用され、これらの売上金は悲田院の収入になりました。

つぎに、かわた身分の仕事として江戸時代には大きな仕事になる艶牛馬処理の仕事ですが、幕府、藩、奉行から委託された仕事といえます。古くは、死んだ牛馬も人

間と同じように葬られていたということがあります。戦国期になり牛馬の皮が武器として重宝され、皮をとる仕事、皮革業となつていきます。その後、生類憐みの令を出した徳川綱吉以降、死んだ牛馬しか処理できなくなり、この仕事がかわた身分の仕事となりました。死牛馬処理の権利のある地域を草場といいます。草場や落ち牛をめぐって村同士の争論が多く起きています。このことは死牛馬処理がもたらす経済的利益がいかに大きいものであったかを物語っています。皮革業がいかに大きなビジネスになつていたかを知ることが出来ます。天明の飢饉の時ですが、津軽藩では、大坂の札差からの借金返済に追われた藩は飢饉に苦しむ領民から過酷な取立てを行い、餓死者がたくさん出ました。ところが、他地方であります、かわた村からは餓死者が出ていません。このことはかわた村が皮革業でいかに経済的に潤っていたかを物語っているといえます。

皮革は太鼓や雪踏に使われました。これらの製造を担ったのはかわた身分であります。太鼓製造では天部の橋村理右衛門が太鼓屋としてよく知られています。太鼓の張替えをした際、太鼓の品質を保

証する証書が数多く残っており、す。保証期間が三、五、七年のものも見られ、これらを見る限り、張替えの技術に相当自信を持つていたことが伺えます。江戸時代に普及した雪踏ですが、草履裏に皮革を張った履物です。この製造に当たったのはかわた身分です。履物といえば雪駄の他に下駄もありますが、下駄は町内で履くものであつて、目上のところに向う時は雪駄を履きます。このほかに、死牛馬処理の仕事から膠の製造も行われます。膠は京都の産業と深いかわりもち、たとえば京人形の製造には欠かせないものです。膠製造については、七条村に対して隣村の塩小路村が苦情を申し出ている史料が残っていますが、製造過程で出る臭い匂いが問題でした。太鼓、雪踏や膠等の製造は斃牛馬処理の仕事から別れて出てくる仕事であり、これらもかわた身分の仕事であつたのです。

非人身分の人々がどのような仕事をしていたかですが、これが最後に挙げました芸能プロダクションの仕事であります。物乞いをする人々もいましたが、非人身分の多くが芸能に携わっていました。身分制確立前には町の辻々で説教をした琵琶法師もいます。琵琶法

師は普通は差別はされていないのですが、琵琶を弾きながら「へつといさん」のお祭りをする人々は身分が下と言われていました。警刑吏役の与次郎ですが、芸能でもよく出てきます。歌舞伎での猿曳きの与次郎がそうです。与次郎が行ったのが節季に厄払いをする祝福芸であります。季節的な芸能には正月の大黒舞、一二月の節季候せきせうがあります。これを行うのは悲田院から村々に派遣された番人です。

このほかに物真似をして人々を面白がらせたりする雑芸といわれるものもあります。さらに、京都の町ではこれらの芸能のほかに門芝居が見られました。芸事の好きな人が行っている例が「翁草」で紹介されていますが、これらを行つたのは非人小屋に住んでいた非人身分の人々であります。町の人々にもてはやされる芸人たちの芝居の様子が生き生きと描かれている。一方でこれらの芸人が非人小屋頭から貸し衣装代をはじめとして容赦ない搾取をうけ、「嗚呼憐れむべき哉」と嘆じられていることが中島棕隠の「都繁盛記」で描かれていることを紹介されました。このように好評を博する門芝居に対して町々では非人身分の増長と見

て、風紀が悪くなるので統制したほうが良いということになり町では門芝居を行うことを禁止していきます。非人が行う門芝居に対する一般の人々の冷たい眼差しをそこに感じる事ができます。安政年間以降、取締りが始まります。明治期に入り文明開化のなかで門芝居のような卑猥なものはだめだという事で禁止、抑えられていきました。

近世期におけるかわた身分と非人身分に共通の仕事と、かわた身分の中心の皮革ならびに非人身分の中心の芸能について、『京都の部落史』に収められている数多くの史料を通して非常に詳しく、また、わかりやすくお話をしています。近世期のこれらの人々が行つた仕事の実態につき理解を深めることが出来ました。また、史料を読むことの面白さは単に事実を知るといふことだけではなく、実際に生きてきた人々がどのような考えを持ち、生活してきたか、人々の息吹を読み取ることが出来るのですという指摘はぜひとも心に留めておきたいと思いました。

(京都部落問題研究資料センター運営委員)

京都府・市における

教育の機会均等への施策について(3)

第三次小学校校令以降を中心に

白石 正明

三、就学機会獲得の気運の高まり

前号末尾で、就学補助の動きが頓挫していく流れは、一九〇〇(明治三三)年の第三次小学校校令の文部省案の変更に影響されたものではないかと記した。その詳細を述べようと思うが、その前に、同年二月から四月にかけての、京都府紀伊郡他での就学補助の動きに呼応するように、就学機会を求める動きが活発化していく様子を具体的に述べておきたい。当時の新聞紙上には、就学の機会が新たに開かれた事例が報じられている。例えば、同年三月、相楽郡大川原村字童仙房で小学校が新設される。戸数七〇戸の学齢児童六〇余名が就学することとなった。郡会から同年度は一五〇円、次年度から明治三六年度まで毎年三〇円が補助される計画も決定されている(注1)。

「一般学齢児童と共に就学する様取計」(注2)らせるのに成功した。ここ長谷部落は、一八七七(明治一〇)年に浄善寺本堂に学校を開設、八一年に長岡小学校の支校となっていたが、八八年に経費負担に耐えられず廃校となった。しかも、本校にも通えず「爾来当村児童八全ク教育ノ道ナキ不幸ノ青年トナル」状態であった(注3)。それ以降の部落の取り組みの詳細はすでに灘本昌久の論文で明らかだが(注4)、徴兵・軍隊での差別が動機となつて、本校への就学運動が活発化し、そして成功が報道されたのは、〇〇年五月のことであった(注5)。それによると、村や中郡当局への先年来的陳情ではラチが明かなかつたため、部落総代石岡新助に「哀願書」を提出した。府当局は「普通教育奨励の折柄打棄て置くべからざる」として「直ちに塩崎視学を同郡へ派遣し、郡長及村長等と協議の上」、四月から長谷部落の児童の就学を認めることになった。「御一新以来三十余年の年月を經過」してのことで、遅きに失しているが、しかし、この時点での府当局の動きは早い。しかも、「哀願書」の原文を含めて、このいきさつはメディアに流された。この報道は、他県にも流れ、成功事例として模範となったという(注6)。「教育時論」第五四三号(明治三年五月一日)もまた、この「丹後国中郡の新平民」が、共学を訴え、府庁が直ちに視学を派遣。善処したことを記し、教育者及び当局者は「早く彼等をして憐むべき境遇を脱せしめ、一視同仁の聖意に副ふ」よう、彼等の訴えの前に努力するよう要望している(注7)。

後に親友夜学校を設立するにいたる愛宕郡田中部落で、初めて教育施設設置が住民によつて検討されたのも、この年であった(注8)。これと、長谷部落の事例との関係は、今のところ不明だが、教育機会を閉ざされていた人びとに、扉があくのではないかと感じさせたのか。教育機会の開設とは異なるが、九九年七月に与謝郡算所で、九月に同郡宮津杉の末で、いわゆる

部落学校と称されて分学を余儀なくされていた状態を解消し、本校就学という正常な形となる事例が知られている(注9)。就学機会の整備が期待されていた空気が、記事となったといえよう。

四、就学補助策の頓挫過程

貧困者の子弟に対して市町村費より補助を与えて、教育の普及を図ろうとする施策の登場と衰微は、文部省による小学校令改正案の変遷に影響をうけたものと思われることはすでにふれたが、近代日本の最大課題といえる就学率向上への試みと、教育費問題のからみあいを見るために、この間の事情に少し詳しくふれておきたい。

一九〇〇年の第三次小学校校令は、樺山資紀文部大臣の下で、沢柳政太郎普通学務局長らが中心となつて取り組まれた。一月一日に閣議に提出された文部省案は、先に記したように、就学向上のために、授業料の廃止、就学させる義務を果たさない保護者への罰金、就学奨励のための市町村官吏への警察官の補助、市町村費による就学補助であった。就学向上のためには、公権力の行使もするが、金もだそつということであった。

義務教育の観点から授業料廃止

と、国庫補助の方針は整備されつつはあった。一八九三(明治二六)年二月の教員俸給に国庫補助をつけるという衆議院・貴族院での建議可決を皮切りにした国庫補助の問題は、九六年三月の「市町村立小学校教員年功加俸法」の成立となった。七二年の「学制」から八〇年の改正教育令の翌年までは、まがりなりにも支出されていた国庫からの補助がここに復活することとなった。同じ九六年には日清戦争の清国からの賠償金の一〇%を教育基金とすることが決まり九九年一月に「教育基金令」ができた。また同年一〇月二〇日には、教員の年功加俸だけを目的にしたさきの法律に代わって、市町村立教員給与全般を補助する「小学校教育費国庫補助法」が成立、〇〇年四月一日施行と決まった。ところが、政府は、その直前の年末になつて、九六年三月の年功加俸法と(施行日も決定していた)九九年一〇月のこの国庫補助法を統合するとの論理で、市町村立小学校教員加俸に国庫補助を行うことを目的とした「市町村立小学校教育費国庫補助法案」を議会に提出、可決、〇〇年三月公布となった。「一般の国庫補助の精神」から「年功加俸及特別加俸に限定」(注10)へと

逆戻りさせたといえる。一方教育基金の方も、日露戦争軍費に流用されていくのは周知のことである。政府のやりかたは、国庫補助の方針をとるとしながらも、その範囲を何とか圧縮する手立てを講じていることがわかる。そのような状況の下で、文部省は、授業料廃止と市町村費による就学補助と罰金科料、警察力利用を一九〇〇年一月一日に打ち出したことになる。四月一二日の地方官会議で、樺山文相は、教育の国庫補助の監督使用に際しての地方官の職責の重要性を説くとともに、現行施設での就学向上のための半日学校に言及しており、暗に、この国庫補助が十全ではないことを認めている演説をしていた。(注11)

だが、文部省事務当局は、国庫補助と授業料廃止と就学補助のからみで、どの程度の費用が必要か概算している気配がない。〇〇年六月一四日付の新聞に沢柳普通学務局長の談話が掲載されている。そこで、沢柳は、「世間では改正令に依り授業料が全廃になるから生徒が増し其の結果学校を増設する必要を生じ、町村の負担に堪えずとて反対する府県もあるやに噂さあれど実際今日まで斯

る反対意見を提出した地方官一人もありません」と断言している。また、就学児童の増加に必要な設備の整備は、無論町村の経済を斟酌しなければならぬが、「實際之れを測量する事は却々出来ませんが随分負担に堪へない」と云て居ながら「案外容易な事があるものです」とし、「マア大学では学生一人以下一ヶ年の経費は百円、中学校では三十円、是等は高い方ですが、小学校は実に廉ものです、高等尋常平均で一人五円、尋常小学なら二円五十銭です、此安い経費で将来の日本国民が出来るのですから、町村は其子弟教育上に大奮発をせねばなるまいと思ひます」(注12)と結んでいる。

一人の地方官の反対もないという沢柳の言葉は虚偽で、四月の地方官会議で教育費の町村負担増大を憂える地方官から西郷従道内務大臣宛の建議が提出され、六月七日内務省総務長官小松原英太郎から、文部省の小学校改正案の検討作業をしていた内閣法制局宛に、文部省案への反対が知らされていた(注13)。沢柳とはばけているが、文部省案は暗礁に乗り上げていた。

(以下、次号に続く)

注

- (1) 『京都日出新聞』明治三十三年三月二五日。
- (2) 『京都日出新聞』明治三十三年五月三日。(京都部落史研究所編『京都の部落史6・史料近代1』一九八四年、四七五頁所収)。
- (3) 『浄善寺永代記録』明治二年。(京都部落史研究所編『京都の部落史9・史料補編』一九八七年、四一五頁所収)。
- (4) 『明治期京都における被差別部落の義務教育について 府下四部落の事例を通して』(『京都部落史研究所紀要』第三号、一九八三年三月)。
- (5) 注(2)に同じ。前掲『京都の部落史6・史料近代1』の四七四頁、史料42の注(1)にあるように、本校への通学が決まったのは、『浄善寺永代記録』によれば明治三年四月となっている。新聞報道では明治三年五月である。明治三年とする寺の記録が誤りだとする根拠を、筆者は持たないが、新聞が一年も前のことを注釈もなく報道することは考え難く、筆者もこの事例は三年のことだと思っている。付言すれば、この新聞報道の情報元は、府当局と思われるが、もし三年であつたら、府は一年後にわざわざメディアに流したことになる。
- (6) 前掲『浄善寺永代記録』明治三二年。

- (7) 前掲『京都の部落史6・史料近代1』四七五～四七六頁。
- (8) 『貧民の教育(2)』大阪朝日新聞。京都附録、明治四十二年一月六日。
- (9) 『丹後新報』明治三十二年七月二三日、九月一七日。「言行三束」明治三十二年七月。(前掲『京都の部落史6・史料近代1』、四七一頁所収)。
- (10) 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第四卷(龍吟社、一九三八年)四二頁。国庫補助法成立への詳細は同書二八～四五頁、国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第四卷、「学校教育2」(一九七四年)八六～九三頁を参照。
- (11) 『京都日出新聞』明治三十四年一月五日。
- (12) 『京都日出新聞』明治三十四年一月四日。
- (13) 佐藤秀夫『教育の文化史1』(阿吽社、二〇〇四年)四五～五三頁。

【前号の訂正】

前号で就学補助の方策の三例とともに、その具体例が確認できていないと記した。この記述が正確さを欠いていたことを、お詫びしておかなければならない。それは、船井郡竹野村の事例だが、一九〇〇(明治三三)年の「貧民就学児童給費規程」(注1)によって、同年から〇四年までに、毎年、給付額

は異なるが、府税戸数割中末級三ヶ等の保護者の児童に学資補助がなされていた。給付額は、〇〇年は前号にあるように一円から一円五十銭で、その翌年からは減額されている。同じ史料のなかで、紀伊郡上鳥羽尋常小学校が、一八九九一年に「上鳥羽尋常小学校児童保護規程」を制定し成果を挙げていている旨が報告されている。その保護規程は、前号記載の相楽郡の事例と同様の学用品の他、衣料補助も含んでいる。ただし、このような個々の学校の就学補助策は、本稿の対象とはしない。対象はあくまでも政策として地域に実施されたものとしての。また、ここで留意されたいのは、竹野村また上鳥羽尋常小学校の事例を記す史料は、〇五年一月のもの、つまり、後述する〇五年一〇月の京都府令第三八号「尋常小学校児童に対する教育資金補助規程」がだされた頃のものである。

(注1) 京都府内務部学務課『京都府初等教育優良事蹟』第一篇、明治三十九年三月。竹野村の「規程」の前文は、京都部落史研究所編『京都の部落史6・史料近代1』(一九八四年)四七九～四八〇頁に所収。

(京都部落問題研究資料センター運営委員)

本の紹介

浅尾 篤哉編(一文字工房、二〇〇六年六月)

『三浦参玄洞論説集』

廣岡 浄進

参玄洞さんげんち

参玄洞三浦大我は、全国水平社の創立以前の西光万吉の思想におおきな影響をあたえ、また宗教新聞『中外日報』に拠って水平社や、あるいは広岡智教の主唱した黒衣同盟を支持する論陣をはったことで、部落史にその名を刻む人物である。だが参玄洞の思想は、初期水平運動との関わりについてはしばしば言及されるものの、その最期まではこれまで明らかではなかった。本書は、この三浦参玄洞の『中外日報』紙上で展開された論説の主要なものをまとめ、『中外日報』記者としての参玄洞の全体像を呈示する史料集である。

参玄洞の人の思想については、本書巻末に編者の浅尾篤哉氏による解説論文がある。それによれば、参玄洞は一八八四年生まれ。実家は浄土真宗僧侶ではなく、篤信家であった母の教育方針によって仏教学校に学び、長じてのち入婿し

て誓願寺に住職として入寺する。この誓願寺こそが西光万吉の実家である西光寺のすぐ隣にあり、そこで西光らとの接点が生まれたのである。ただし参玄洞が生涯をこの住職として終えることはかなわなかった。小作争議に介入し、その調停が檀家総代らの抵抗にあつて挫折するなかで、檀家一同への信頼を彼自身が喪失し、在寺二〇年の奮闘を総括して出寺する。とくに一九二七年、参玄洞四四歳である。以後の後半生を、彼は『中外日報』専属記者として生きた。

本書には、『中外日報』囑託記者として執筆を開始した一九二一年から、アジア太平洋戦争に日本が敗戦する直前の一九四五年に病を得て亡くなるまでの二〇有余年間の論説が収められている。一読して、参玄洞の言論活動は、おおきく三期に分けられるように感じられた。第一は、自身の真宗理解

にもとづいて、宗教者の社会的責任を訴えはじめた時期。水平運動を支援し、無産運動を擁護するなかで、マルクス主義へと接近する。第二は、マルクス主義の宗教否定論との論争の展開。そして第三は、

とくに日中戦争開始後に顕著となる、国家主義化である。そこに通底するのは矛盾の山積する現実社会にたいして切実さを示さない既成教団にたいする批判であり、とりわけ初期には自らもその末寺の住職である本願寺の体質への舌鋒鋭いものがある。ただし参玄洞の特色は、教団中央にたいする批判にとどまらず、むしろじかに門信徒と接する現場に身を置く末寺住職僧侶らにむかって躬行実践を説くことに、より重きをおいたことにあるだろう。

第一の時期は、ほぼそのまま誓願寺住職であった期間である。部落差別に憤り、「真俗二諦」としてこれを是認してきた教学を維持する教団を批判する。やがて水平運動関係者が左傾化して無産運動に進出するのにもない、農村問題に視野をひろげる。そしてその現場での解決に寺院住職こそが果たるべしと論陣をはり、参玄洞自身がそれを実践したのである。そ

の方法論は、消費組合を基盤として社会意識を育て、協同体の建設を目ざしたものであったが、実際のどのような事例を範としたのかは、所収の論説からは必ずしも明らかではない。

このほかに目をひくのは、廃娼運動への批判である。農村や部落の貧困を解決しようとする廃娼論は畢竟空論であると参玄洞は看破し、廃娼運動にむかつて農民運動と水平運動との結合を呼びかける。参玄洞における階級的視点の受容の、ひとつの到達点を示すものである。

参玄洞が寺を出たことを画期として、その論説の主たるテーマにマルクス主義者たちによって提唱された反宗教闘争との論争が登場する。ちょうど水平運動においてモボル派が有力となり、マルクス主義の教条に従って、対東西両本願寺闘争のような宗教的な課題から離れていく。このことと照応してか、参玄洞の論説からも水平運動への言及が急減していく。ちなみに参玄洞において、宗教者の社会関与とは、教学上のなんらかの根拠づけを必要とするものではなかった。宗教とは実践すべきものであり、信仰が体现するのだとい

う。マルクス主義陣営からの「宗教はアヘンである」という全否定には反駁しつつも、彼は既成宗教の現実からの遊離を、資本主義への依存であるとして、批判を続ける。

しかしこの論争はうやむやに終わる。治安維持法による共産党弾圧で共産党関係者たちが大量転向すると、参玄洞はこれにかなりの幻滅を覚えたようである。共産主義者が示す求道性や自己犠牲を宗教的な利他であるとして評価していただけない、その衝撃は小さくはなかつたのだろう。まさにこの時期、世界恐慌下の一九三二年の論説「自己を結びつけよ」は、おそらくその転換の始まりを示すものである。ここにいたって参玄洞は、「ブルジョア自由主義」の転

落期の到来の、「次に来るものは仮令どの方面から来るにしてもプロレタリア農民の利益を保証する統制主義のものであらねばならぬ」と述べ、しかも「思想の左右」などは問題でないと主張する。国家主義的な論説が鮮明に出てくるのは日中戦争突入後であると編者が指摘しているが、農村問題という視点からする戦時革新への期待は、すでにこの段階から参玄洞のなか

にあつたと考えられるのではないだろうか。

参玄洞が戦時下に、町内の神社での戦勝祈願の合同参拝に参加し、彼の住む住宅街の町会からの参加者が少なかったことを不満とする一文がある。編者はこれを、真宗の根本である神祇不拝をやぶる「真俗二諦そのものではないか」と批判している。だが、参玄洞が妹尾義郎らの新興仏教青年同盟に示しているつよい好感ともあわせて考えると、参玄洞の現実関与の論理にはさらなる検討が必要なのではないかと感じられた。

著作目録を一瞥すると在日朝鮮人問題への論及も比較的早くからあり、また晩年には宮沢賢治について一書をものしている。これらについても、その一端を窺えるような論考を収録してもらえれば、参玄洞の思想の幅がより感じられたのではないだろうか。なお、解説によれば、梅原真隆（親鸞研究と融和運動に名をなし、戦後は部落解放全国委員会の発起に名を連ねた真宗僧侶）と同窓であったという。このような彼の人脈がどのように論に反映しているのかも、今後の研究の課題であろう。

（大阪大学大学院博士後期課程）

ト調査から 平家陽一 / 「逆風」のなかでの青少年施策
 充実はどう取り組むか 大阪市の青少年会館条例「廃止」
 問題への取り組みを手がかりに 住友剛
 成人学習のマイ効果に関する考察 立田慶裕
 協働の教育 筑豊・田川市の教育改革 高田一宏
 資料紹介 松本治一郎記念会館旧蔵資料 松本治一郎関
 係書簡・資料から その1 本多和明
 書評
 三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィ 社会を書
 く / 差別を解く』 岸政彦 / 秋定嘉和『近代日本の水平
 運動と融和運動』 今西一
 部落解放研究 176 (部落解放・人権研究所刊, 2007.6) :
 1,000円
 特集 学校評価と学力保障
 大阪府学校教育自己診断の意義と課題 八尾坂修 / 地域
 に根ざした学校評価 岬町の取り組み 岡田耕治 / 田
 川市学力向上プロジェクト 学力実態調査の実施と活用
 について 中野直毅
 ここがおもしろい! 今の学校、今の子どもたち 熊谷正
 敏
 近世陽明思想の被差別部落民観について 『続 人物で
 つづる被差別民の歴史』 (中尾健次・黒川みどり共著)
 によせて 森田康夫
 史料紹介 「弾直樹追賞の事情」の公文書について 友寄
 景方
 資料紹介 松本治一郎記念会館旧蔵資料 松本治一郎関
 係書簡・資料から 2 本多和明
 書評
 孝忠延夫『インド憲法とマイノリティ』 浅野宜之 / 谷
 本寛治『CSR 企業と社会を考える』 合力知工 / 大阪府
 教育委員会事務局スタッフ編『行政が熱い 大阪は教育
 をどう変えようとしているのか』 清原正義
 部落解放研究くまもと 53号 (熊本県部落解放研究会
 刊, 2007.3)
 特集 近世九州における皮革業 第25回九州地区部落解
 放史研究集会報告
 中近世の皮革業の特徴について 山本尚友 / 江戸期 渡
 辺村皮商人と九州の「かわた」 阿南重幸 / 佐賀の事例
 から 唐津藩の皮座について 『御武具方御役所二而
 皮座御仕組一件』 (唐津藩佐志組大庄屋岸田家文書) より
 中村久子 / 「松原革会所文書」にみる、幕末期福岡
 藩の皮革 大坂との関係を中心に 竹森健二郎 / 日向
 における皮革について 延岡内藤藩を中心に 平田公
 大 / 熊本藩近世被差別部落の皮革業について 樋口輝幸
 新たな視点からの「フィールドワーク〜『むら』を歩いて〜」
 の作成 豊後大野市大野町
 人権侵害としての水俣病事件 いま改めて問われるべき

2006年の現状 花田昌宣
 部落問題研究 179 (部落問題研究所刊, 2007.2) : 1,1
 11円
 座談会 『水平社創立の研究』 (鈴木良著) をめぐって
 報告1 全国水平社創立史研究の新たな展開 竹永三男 /
 報告2 社会運動史研究の立場から 広川禎秀 / 報告3 近
 代地域社会論の観点から 奥村弘 / 討論 竹永三男、広川
 禎秀、奥村弘、塚田孝、鈴木良
 「教育の平等」論のアンビバレンスを問う 2 コモン・
 スクール改革期から教育基本法の意義へ 森田満夫
 書評 広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論 1950
 年代を中心に』 梅本哲世
 文学部論集 91号 (佛教大学文学部刊, 2007.3)
 民俗学におけるジェンダー研究と近代家族 八木透
 もやい 長崎人権・学 53号 (長崎人権研究所刊, 2007.
 3) : 700円
 人権を考える 5 映画「新 あつい壁」 藤澤秀雄
 ライツ 96 (鳥取市人権情報センター刊, 2007.5)
 今月のいちおし! 『となり町戦争』 (三崎亜記著) 田
 川朋博
 ライツ 97 (鳥取市人権情報センター刊, 2007.6)
 今月のいちおし! 『条例のある街 障害のある人もない
 人も暮らしやすい時代に』 (野沢和弘著) 福壽みどり
 リージョナル 6 (奈良県立同和問題関係史料センター
 刊, 2007.5)
 中世真土宿と近世上夙村 吉田栄治郎
 明治中期の被差別部落における寄留差入書をめぐって
 人々の移動はどのように行われたか 井岡康時
 明治前半期の地方官僚と部落問題 田部密探索 1 奥
 本武裕
 史料紹介 白石畑村医王寺文書 寄本和臣
 リベラシオン 125 (福岡県人権研究所刊, 2007.3) : 1,
 000円
 特集 第12回全国部落史研究交流会報告
 近世初頭かわた (長吏) 集団のキリスト教受容 阿南重
 幸 / 真宗と被差別部落 研究史の整理 山本尚友 / 初
 期水平社運動がみた改善・融和運動 守安敏司 / 全国融
 和聯盟と中央融和事業協会の再編 融和運動における
 「国策確立」の意味をめぐって 本郷浩二
 江戸時代の医学と「癩」 鈴木則子
 図書の紹介 『近代日本の水平運動と融和運動』 (秋定
 嘉和著) 田原行人
 ビデオ紹介 「制服の処女」 (レオンティーネ・ザーガ
 ン監督, 1931年, ドイツ) プロイセン主義とワイマー
 ル精神 船津建

ヒューマンライツ 229 (部落解放・人権研究所刊, 2007.4) : 525円

広がる格差、深刻化する部落差別 谷川雅彦

ジェンダーで考える教育の現在 4 教育基本法「改正」をジェンダーの視点で読む 木村涼子

「同和教育論」の教室から 4 虹色の多様性に学ぶ 山田公二

書評 木戸衛一編『「対テロ戦争」と現代世界』 佐々木貴弘

ヒューマンライツ 230 (部落解放・人権研究所刊, 2007.5) : 525円

同和行政に求められる課題 公益性の観点から 中川幾郎
いま、問われる部落問題解決にむけた今後の課題 部落解放運動の展開と課題 社会的責任の観点から 谷元昭信
走りながら考える 73 格差の連鎖を断ち切るために 諦観マインドの克服を 北口末広

被差別民たちの「世間」との折合い方 『大阪の部落史』第3巻からみえること 白井壽光

ジェンダーで考える教育の現在 5 教員 学生間の恋愛という難問 古久保さくら

「同和教育論」の教室から 5 フリーターのイメージはどこからくるのか 鷗飼洋一郎

ヒューマンライツ 231 (部落解放・人権研究所刊, 2007.6) : 525円

同和行政を人権行政として進めるとは 私の基本哲学 炭谷茂

走りながら考える 74 一つの言葉・単語のもつ重みを考える 「事実上の同和对策事業」とは何なのか 北口末広

「学力格差社会」の現状と課題 耳塚寛明

ジェンダーで考える教育の現在 6 女子校における女子型エリートの育成 今田絵里香

「同和教育論」の教室から 6 アメラジアン・スクールをめぐる「願い」と「挑戦」 比嘉康則

ひょうご部落解放 124 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2007.3) : 700円

特集 ストップ! 身元調査

再び兵庫の部落史に学ぶ 4 丹波の太閤検地と被差別部落の形成 丹波市の『太閤検地帳』と『延宝検地帳』の分析 安達五男

友井公一・斎藤洋一往復書簡

本の紹介

『水平の行者 栗須七郎』(廣畑研二著) 中川健一 / 『デカンショのまちのアリラン 篠山市&朝鮮半島交流史~古代から現代まで~』(篠山市人権・同和教育研究協議会編) 飛田雄一

部落解放 581 (解放出版社刊, 2007.5) : 630円

特集 日本国憲法60年

本の紹介 『夢・葬送 浪花の唄う巨人・パギヤン SONG BOOK』(趙博著) 柳原一徳

新型「電子版・部落地名総鑑」=「B地区によろこそ! i n愛知県」が発覚 写真や動画、地図までつけた悪質極まりない差別ホームページ 山崎鈴子

『部落 三百万人の訴え』の出版 中 書かざるは差別、書くも差別 平野一郎

差別を直視し、正しい歴史認識を 人種差別に関する国連特別報告者が日本を語る ドウドウ・ディエン
部落解放 582号 増刊号 (解放出版社刊, 2007.5) : 1,050円

人権キーワード2007

部落解放 583号 (解放出版社刊, 2007.6) : 630円

特集 共謀罪を考える

本の紹介 『排除型社会 後期近代における犯罪・雇用・差異』(ジョック・ヤング著) 原口剛

「法」失効後の「同和地区」の位置づけと呼称問題 大阪府におけるこれまでの動向をふまえて 谷川雅彦
裁判和解をかちとった枝川朝鮮学校 豊田直巳

日本支配下パラオでのハンセン病患者虐殺 強制隔離の生存者が証言 藤野豊

死刑制度は必要か? 正しい情報にもとづいて議論を 神林毅彦

『部落 三百万人の訴え』の出版 下 「一切の不利益事象が差別」か 平野一郎

見なされる差別考 補論 データで考える忌避意識論 上 奥田均

差別の歴史を考える 32 戦後民主主義と差別 ひろたまさき

部落解放 584号 (解放出版社刊, 2007.7) : 630円

特集 相談事業と隣保館

水平線 ドキュメンタリー映画と私 小林茂

本の紹介 『部落史に学ぶ 2』(外川正明著) 平沢安政
手記 福岡県八女郡立花町・連続差別八ガキ事件 犯人を捜し出し、糾したい! 熊本和彦

見なされる差別考 補論 データで考える忌避意識論 下 奥田均

差別の歴史を考える 33 高度経済成長と差別 ひろたまさき

部落解放研究 175 (部落解放・人権研究所刊, 2007.4) : 1,000円

特集 差別撤廃条例の現状と課題

部落差別撤廃・人権条例の制定の経過・現状・今後の課題 友永健三 / 「特措法」後の部落の実態とこれからの課題 2005年度鳥取県同和地区生活実態把握等調査から

國歳真臣 / 2006年度全国隣保館市町村合併アンケー

- 50円
 人権文化を拓く 119 いま、あらためて人権の意義を考える 金子匡良
 であい 541 (全国同和教育研究協議会刊, 2007.4) : 150円
 「給食費未納」問題...格差社会の教育格差として考える 小池將義
 人権のまちをゆく 36 デカンショのまちのアリラン
 人権文化を拓く 120 NOという子どもの声を聴いている? 亀井明子
 であい 542 (全国同和教育研究協議会編, 2007.5) : 150円
 であい 8 同和教育と私 宇山眞
 人権文化を拓く 121 多民族・多文化の共生社会と子ども達の学習権 丹羽雅雄
 であい 543 (全国同和教育研究協議会編, 2007.6) : 150円
 人権文化を拓く 122 今、「安心、安全」のうたい文句ほど恐ろしいものはない 森田ゆり
 同和教育論究 27 (同和教育振興会刊, 2006.12) : 1,500円
 戦時下の女性たち～男女共同参画を考える一視座～ 小川真理子
 軍隊と性暴力 廣川朝子
 同朋運動をめぐる課題 「名称」問題についての一考察 岩本孝樹
 『三浦参玄洞論説集』刊行によせて(上) 藤本信隆
 史料紹介 近世真宗差別問題史料 3 山科御坊・西山御坊土持一件(下) 左右田昌幸
 どの子ども伸びる 376 (部落問題研究所刊, 2007.4) : 735円
 「人権教育」批判 「福岡いじめ自殺事件」の背景の問題 谷口幸男
 どの子ども伸びる 377 (部落問題研究所刊, 2007.5) : 735円
 「人権教育」批判 「いじめ自殺事件」の背景にある人権・同和教育の内容 1 谷口幸男
 どの子ども伸びる 378 (部落問題研究所刊, 2007.6) : 735円
 特集 格差社会と子ども
 「人権教育」批判 「いじめ自殺事件」の背景にある人権・同和教育の内容 2 谷口幸男
 どの子ども伸びる 379 (部落問題研究所刊, 2007.7) : 700円
 「人権教育」批判 「自尊感情と参加から対立解決へ」の問題点 1 谷口幸男
 なら解放新聞 744号 (奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2007.3) : 140円
 どう考える? 部落解放同盟をめぐる不正事件 一連の「同和不祥事」と人権対策について 山下力
 なら解放新聞 745号 (奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2007.4・5) : 140円
 県連大会で何を論議するか(案)
 被差別部落の歴史的諸相を考える 吉田栄治郎
 岸上健次さんを悼む 藤田敬一
 [奈良県立同和问题関係史料センター]研究紀要 13号 (奈良県教育委員会刊, 2007.3)
 明治初期大和国における非人番制度の改革と戸籍編成 井岡康時
 部落改善運動の水脈 十五日講・中村諦梁・中尾請軒・そして大和同志会 奥本武裕
 近世夙村の被賤視解除の戦略をめくって 吉田栄治郎
 「東大寺文書」に記された「坂ノ穢多」 中世大和の河原者に関する考察 山村雅史
 「水国争闘事件」の再検討 中村泰彦
 中世大和の女性と仏教 西口順子
 ねっとわーく京都 219 (ねっとわーく京都21刊, 2007.4) : 500円
 ウォッチャーレポート 恥をかき続ける監査委員 市会議員として監査委員をつとめたお歴々ははたしてどのような態度をとってきたのか 寺園敦史
 ねっとわーく京都 220 (ねっとわーく京都21刊, 2007.5) : 500円
 社会人入学体験レポート 社会人大学院の現実と面白さ 寺園敦史
 ねっとわーく京都 221 (ねっとわーく京都21刊, 2007.6) : 500円
 特集 市政評価アンケート
 テーマ「全体評価・同和・区役所・市政改革」知れば知るほど多くなる同和行政見直し、終結の声。
 タダで市有地が同和団体に提供されていた 解放センター・みかげ会館事件 塩見卓也
 ねっとわーく京都 222 (ねっとわーく京都21刊, 2007.7) : 500円
 市政レポート 早くも頭もたげる「うやむや」体質 「ウミを出しきる」どころか組織をあげてウミを隠蔽!? 寺園敦史
 ウォッチャーレポート 京都市職員の犯罪・不祥事根絶のための提言 市役所の腐敗体質の抜本的改善に向けて 村井豊明
 はらっぱ 272 (子ども情報研究センター刊, 2007.4)
 特集 いま、幼児教育に問われること
 はらっぱ 273 (子ども情報研究センター刊, 2007.5)
 特集 子どもの権利擁護の現状と課題

- 元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 15 鈴木俊亮
 試行社通信 246号(八木晃介刊, 2007.4)
 奈良市検討委・批判
 部落解放運動の今後のあり方についての提言案(骨子)
 資料館紀要 35号(京都府立総合資料館刊, 2007.3)
 資料紹介 津田道子氏旧蔵資料について 当道、地歌等
 曲関係資料 文献課
 人権21 調査と研究 187(岡山人権問題研究所刊, 2007.4): 650円
 特集 これからの人権教育
 ドイツとヨーロッパの人権学習 3 ドイツにおける人権学習をめぐる議論の変遷 生田周二
 人権と部落問題 758(部落問題研究所刊, 2007.4): 630円
 特集 生きる権利 4 キラッと輝く自治体
 現地報告 京都・宇治市「同和対策事業」見直しの現状 宮本繁夫
 差別と向き合うマンガたち 37 マンガリテラシーに対する新たな驚き「かく」ことの土壌の差 吉村和真
 文芸の散歩道 中上健次の『路地』 嘶 菱崎博
 戦後同和行政の展開と支配政策 8「同和対策の縮小・削減」政策への転換 下 杉之原寿一
 人権と部落問題 759(部落問題研究所刊, 2007.5): 630円
 特集 「いじめ」問題の解決の方向
 現地報告 島根県 島根県における同和行政・教育の終結をめざす取り組み 片寄直行
 文芸の散歩道 『蘭学事始』とその改変作品 杉田玄白らの医学研究を底辺で支えた被差別民 桑原律
 差別と向き合うマンガたち 38 日本人の血 悪役プロレスラーが立ち向かったもの 田中聡
 戦後同和行政の展開と支配政策 9「一般対策への移行＝同和対策打切り」政策(上 A) 杉之原寿一
 本棚 大阪府「旧同和地区」実態調査と人権意識調査について 尾川昌法
 人権と部落問題 760(部落問題研究所刊, 2007.6): 630円
 特集 「日の丸・君が代」と卒業式
 本棚 鈴木元著『京都市の同和行政批判』 杉之原寿一
 差別と向き合うマンガたち 39 少年マンガとテロリズム 田畑由秋/余湖裕輝『アクメツ』 表智之
 文芸の散歩道 戦後の出発と『破戒』の再来 川端俊英
 戦後同和行政の展開と支配政策 9「一般対策への移行＝同和対策打切り」政策(上 A) 杉之原寿一
 季刊人権問題 347(兵庫人権問題研究所刊, 2007.4): 735円
 大阪市の「カラ残業」告発・懲戒問題と芦原病院問題の真実 大阪市政に影を落とす同和行政 伊賀興一
 最終段階を迎えた大阪の部落問題 谷口正暁
 人権問題研究 7(大阪市立大学人権問題研究会刊, 2007.3): 1,500円
 世界都市と外国人労働者 大阪のコリアン労働者の場合 青木秀男
 近代の職人家族における夫と妻 夫の日記に書かれた「妻の行為」の分析を通して 水越紀子
 バングラディッシュにおける初等教育概要 チッタゴン市を一事例にして Iftekhar Uddin Chowdhury
 カンボジアにおける人権文化の構築 仏教僧に対する人権トレーニングの分析 木村光豪
 セクシュアル・ハラスメント対応における諸問題 大阪市立大学を事例として 古久保さくら
 水平社博物館研究紀要 9号(水平社博物館刊, 2007.3): 1,000円
 水平社・衡平社との交流を進めた在阪朝鮮人 アナ系の人々の活動を中心に 塚崎昌之
 全国水平社消滅をめぐる対抗と分岐 朝治武
 史料紹介 『同和通信』に見る「水平社関係記事」3 金井英樹
 月刊スティグマ 131号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.3): 500円
 特集 共に生きる教育 1
 月刊スティグマ 132号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.4): 500円
 一連の解放運動不祥事報道を考える 鎌田行平
 月刊スティグマ 133号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.5): 500円
 部落史を歩く 5 被差別部落と日蓮伝説 坂井康人
 全朝教通信京都版 51(全国在日朝鮮人教育研究協議会京都刊, 2007.5): 250円
 在日の今 在日コリアン青年の話を通して、京都の外国人教育について考える
 月刊地域と人権 279(全国地域人権運動総連合刊, 2007.4): 350円
 広がる格差と人権の後退 都留民子
 「格差社会」と生存権 丹波史紀
 えせ同和行為の実態と対処法 洞口浩史
 月刊地域と人権 280(全国地域人権運動総連合刊, 2007.5): 350円
 インターネット差別事象対策研究会の対応策と関わって
 月刊地域と人権 281(全国地域人権運動総連合刊, 2007.6): 350円
 貧困問題と地域人権 丹波正史
 であい 540(全国同和教育研究協議会編, 2007.3): 1

- 戦国期の禁裏における声聞師大黒の存在形態 杉山美絵
 藝能史研究 176 (藝能史研究会刊, 2007.1) : 1,800円
 特集 芸能と絵画資料 浮世絵研究の新次元
 研究所通信 号外 (部落解放・人権研究所刊, 2007.3) :
 100円
 部落解放・人権研究所第65回総会議案書
 コア・エシックス 3 (立命館大学大学院先端総合学術
 研究科刊, 2007.3)
 障害学生支援の構図 立命館大学における視覚障害学生
 支援を手がかりとしての考察 青木慎太郎
 聴覚障害児の言語獲得における多言語状況 上農正剛
 「望まない強制妊娠」をした性被害女性への支援活動と
 被害者女性の人権 産む・産まないの二項対立を超えて
 小宅理沙
 大阪における障害者自立生活運動 1970年代の大阪青い
 芝の会の運動を中心に 定藤邦子
 差別/被差別関係の論争史 現代(反)差別論を切り開
 く地点 山本崇記
 「障害受容」は一度したら不変か 視覚障害男性のライ
 フストーリーから考える 田島明子
 高麗美術館館報 74号 (高麗美術館刊, 2007.4)
 朝鮮通信使の息吹 仲尾宏
 国際人権ひろば 72 (アジア・太平洋人権情報センター
 刊, 2007.3) : 350円
 特集 アジアにおける人権保障システム整備の動向
 ところ 4 (野洲市刊, 2007.5)
 講演再録 在日外国人が見た日本社会～ここが、へんだ
 よ ニッポンしゃかい～ 朴一
 研究ノート 複合して存在する差別
 こべる 170 (こべる刊行会刊, 2007.5) : 300円
 インタビュー: 部落解放運動再生への道を考える 1
 「不祥事」をどう受けとめるか 山本義彦+藤田敬一
 自著を語る 『ぼくたちは生きているのだ』 小林茂
 こべる 171 (こべる刊行会刊, 2007.6) : 300円
 インタビュー: 部落解放運動再生への道を考える 2 周
 囲との関係をつなぎ直すことからの再出発 山本義彦+
 藤田敬一
 横浜・寿識字学校から 7 精神の棺おけづくり 大沢敏郎
 最近読んだ本から 13 子どもの視点に立って考える 森
 田ゆり著 『子どもが出会う犯罪と暴力 防犯対策の幻想』
 坂倉加代子
 こべる 172 (こべる刊行会刊, 2007.7) : 300円
 同和教育の具体的な検証を 子どもの自立を阻むもの
 中西仁
 学校の儀式 卒業式と入学式 山内寿子
 モノが語りかける人間の歴史 松井章著 『環境考古学へ
 の招待 発掘からわかる食・トイレ・戦争』 重信陽
 子
 あっぱれなおんな 長谷川洋子
 コリアNGOセンター News Letter 11 (コリアN
 GOセンター刊, 2007.4)
 書評 『世界が完全に思考停止する前に』 (森達也著)
 エッセイ 在日コリアン文化散歩 「ディア・ピョンヤン」
 2 小林恭二
 佐賀部落解放研究所紀要 24 (佐賀部落解放研究所刊,
 2007.3)
 唐津藩の被差別民衆 松下志朗
 出会いのなかで学んだこと 牧野久美子
 史料紹介 『口達録』(その2) 中村久子
 雑学 33号 (下之庄歴史研究会刊, 2007.5) : 800円
 気になる造語 五輪塔也
 靖国問題と時代の空気 広野湧人
 論点整理 アジア太平洋戦争期の水平運動・融和運動
 朝治武
 遠敷と納田終と『陰陽頭安倍泰親朝臣記』 フィールド
 ワーク福井報告 土岸喬慶
 異能者論 6 上野茂
 中上健次私論ノート 18 高桑健二
 下之庄歴史研究会30年のあゆみ
 狭山差別裁判 392号 (部落解放同盟中央本部中央狭山
 闘争本部刊, 2006.8) : 300円
 特集 第3次再審請求書を読む
 狭山差別裁判 394号 (部落解放同盟中央本部中央狭山
 闘争本部刊, 2006.10) : 300円
 狭山現地調査のてびき
 月刊滋賀の部落 404 (滋賀県同和問題研究所刊, 2007.
 4) : 400円
 大正期の県内部落の実態と改善事業について 滋賀県同
 和問題研究所部落史研究部会
 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、
 元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 13 鈴木俊
 亮
 月刊滋賀の部落 405 (滋賀県同和問題研究所刊, 2007.
 5) : 400円
 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、
 元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 14 鈴木俊
 亮
 月刊滋賀の部落 406 (滋賀県同和問題研究所刊, 2007.
 6) : 400円
 <学校から仕事へ>の移行の危機に直面する現代社会
 松田洋介
 ニートにも「差別・格差」のない就職の出来る大きな窓
 口を 北村佳三
 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、

- 元気のもととはつながる仲間 28 このムラに生まれたから
醜い生き方をせんでよかった 外川正明
- 時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 3
- 元気の出る学校! 4 ちがいを力にする学校 東部小学
校 志水宏吉
- 語る・かたる・トーク 145 (横浜国際人権センター刊,
2007.3) : 500円
- わたしと部落とハンセン病 18 林力
- 信州の近世部落の人びと 22 旦那寺 5 斎藤洋一
- 同和問題再考 75 「同和教育」の出発 下 田村正男
- 部落差別の現実 56 いじめ問題特集 4 江嶋修作
- 語る・かたる・トーク 146 (横浜国際人権センター刊,
2007.4) : 500円
- わたしと部落とハンセン病 19 林力
- 信州の近世部落の人びと 23 旦那寺 6 斎藤洋一
- 同和問題再考 76 ついに「全同教」結成へ 田村正男
- 部落差別の現実 57 部落差別の実態 3 江嶋修作
- 語る・かたる・トーク 147 (横浜国際人権センター刊,
2007.5) : 500円
- わたしと部落とハンセン病 20 林力
- 信州の近世部落の人びと 24 旦那寺 7 斎藤洋一
- 同和問題再考 77 全同教発足の舞台裏 田村正男
- 部落差別の現実 58 部落差別の実態 4 江嶋修作
- 語る・かたる・トーク 148 (横浜国際人権センター刊,
2007.6) : 500円
- わたしと部落とハンセン病 21 林力
- 信州の近世部落の人びと 25 旦那寺 8 斎藤洋一
- 同和問題再考 78 横向いてきた日教組 田村正男
- 部落差別の現実 59 精神しょうがい者の人権 江嶋修作
- カトリック部落問題委員会ニュースレター 109 (カ
トリック部落問題委員会刊, 2007.5)
- ハンセン病国賠訴訟からみる国家と差別 皇室が果たし
てきた役割 藤野豊
- かわとはきもの 139 (東京都立皮革技術センター台東
支所刊, 2007.3)
- 靴の歴史散歩 84 稲川實
- 正倉院と皮革 4 精緻を極める琵琶(捍撥)の彩絵 イ
ランで発育、中国経由で日本に伝来 出口公長
- 皮革関連統計資料
- 関西外国語大学人権教育思想研究 10 (関西外国語大
学人権教育思想研究所刊, 2007.3)
- 多文化共生社会における教育のあり方を探る その3 ア
イヌ民族について 植田都
- 職業教育プロジェクトに関する考察 インドネシアの事
例 内田智大
- 久しぶりの道徳授業 大田垣義夫
- 福祉サービス苦情解決制度の現状と課題 行政福祉オン
ブズマン制度を中心に 久禮義一
- インドにおける人権問題は解決に向かっているのか 村
田美子
- 関西学院大学人権研究 11号 (関西学院大学人権教育
研究室刊, 2007.3)
- 拡大する自由の中で: 万人のための人権へ向けて? 国際
政府組織と非政府組織のための政策学習の動向 On-Kwok
Lai
- 普遍的人権概念と道徳的多元性 イグナティエフの人権
思想 細見和志
- 介護職のキャリア意識にみるジェンダー構造 高齢者福
祉施設調査を通して 澤田有希子
- 書評 水谷驕著『ジプシー』 舟木讓
- キャンパス・ハラスメントの対策とその動向 中道基夫
- フィルムセッションという挑戦 「知恵としての人権
教育」を目指して 阿部潔
- 季節よめぐれ 231号 (京都解放教育研究会刊, 2007.6)
- 部落史研究から展望する人権教育における部落史学習
吉田栄治郎
- 京都市政史編さん通信 28 (京都市市政史編さん委員
会刊, 2007.4)
- 京都御所・御苑空間と近代日本の天皇制 中 伊藤之雄
- 京都市歴史資料館紀要 21号 (京都市歴史資料館刊, 2
007.3)
- 西田直二郎と『京都市史』 入山洋子
- 京都部落問題研究資料センター通信 7号 (京都部落
問題研究資料センター刊, 2007.4)
- 報告 部落史連続講座 京都の被差別部落と教育2 第3回
戦時下京都の被差別地区と救済・風俗 (秋定嘉和講演)
中島智枝子
- 京都府・市における教育の機会均等への施策について 2
第三次小学校令以降を中心に 白石正明
- 本の紹介 藤野豊著『忘れられた地域史を歩く 近現代
日本における差別の諸相』 杉本弘幸
- 収集逐次刊行物目次 (2007年1月~3月受入)
- 月刊きょうの論談 48号 (論談社刊, 2007.3) : 500円
- 巻頭インタビュー 「人を変えるには、まず自分が変わ
る」部落の実態に学んでこそ生きる同和教育 山本榮子
- 月刊きょうの論談 50号 (論談社刊, 2007.5) : 500円
- 京都市職員不祥事について 信頼回復に向けて第1次総括
の公表が 梶宏
- グローブ 49 (世界人権問題研究センター刊, 2007.4)
- 中世の捨子の救済システム 源城政好
- 外国人福祉委員制度発足 陽のあたらぬ人々を訪ねる
仲尾宏
- 藝能史研究 175 (藝能史研究会刊, 2006.10) : 1,800
円

収集逐次刊行物目次 (2007年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

アイユ 191 (人権教育啓発推進センター刊, 2007.4)

特集 「いじめ」を考える

アジア現代女性史 3号 (アジア現代女性史研究会刊, 2007.2)

特集 ベトナム戦争と女性

明日を拓く 67 (東日本部落解放研究所刊, 2007.2) : 1,050円

特集 教育・啓発活動の展開

座談会 人権を尊重する企業をめざして / 大学における人権教育から 東京墨田の人権教育は継承されるか 大森直樹

史料紹介 『明治前期大審院民事判決録』から 3 神社氏子・祭礼参加に関する四件 藤沢靖介

埼玉県成沢村八坂神社の祭礼参加問題 大審院で勝訴したが祭礼参加の実現は半世紀後 石田貞

あすばる 15 (甲賀・湖南人権センター刊, 2007.3)

ピックアップメッセージ 外国人

IMADR-JC通信 147 (反差別国際運動日本委員会刊, 2007.3) : 500円

特集 世界社会フォーラムと反差別国際連帯

IMADR-JC通信 148 (反差別国際運動日本委員会刊, 2007.5) : 500円

特集 草の根からの反差別国際連帯 IMADR各地での取り組み

ウィングスきょうと 79号 (京都市女性協会刊, 2007.4)

図書情報室

『改正 男女雇用機会均等法』(労働調査会出版局編) / 『21世紀アジア家族』(落合恵美子・上野加代子著)

ウィングスきょうと 80号 (京都市女性協会刊, 2007.6)

図書情報室

『4000人に聞きました ハッピー・ワーキングマザーB00K』(ムギ畑編) / 『老いへのまなざし 日本近代は何を見失ったか』(天野正子著)

大阪の部落史通信 40 (大阪の部落史委員会刊, 2007.3)

第3巻からみえる新しい大阪の部落史像 臼井壽光

書評と紹介 『大阪の部落史』普及版プロジェクト編著 『自覚と誇り「大阪の部落史」を読む 近現代』 八箇亮 仁

解放教育 474 (解放教育研究所編, 2007.5) : 750円

特集 人権教育のひろがりと焦点 日教組第56次教研集会から

元気のもととはつながる仲間 26 笑顔で群れられるカッコいいつながりを求め続けて 外川正明

元気の出る学校! 2 教師が育つ学校 布忍小学校 志水宏吉

書評 「金川の教育改革」編集委員会編著 『就学前からの学力保障 筑豊金川の教育コミュニティづくり』 田中欣和

時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 1

解放教育 475 (解放教育研究所編, 2007.6) : 750円

特集 人権教育の新しい姿 日教組の新しい人権教育指針(案)を見据えて

元気のもととはつながる仲間 27 皆さんが歌ってくれているから、出会うことができた 外川正明

元気の出る学校! 3 「鍛える」学校文化をつくる 細河小学校 志水宏吉

時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 2

解放教育 476 (解放教育研究所編, 2007.7) : 750円

特集 ユース・ティーンズの挑戦

事務局よりお知らせ

昨年度開催いたしました部落史連続講座「京都の被差別部落と教育」(全6回)の講演録ができました。ご希望の方は、送付先の住所と名前を明記のうえ送料120円分の切手を同封して資料センターまでお送りください。折り返し講演録を送らせていただきます。

8月13日(月)から18日(土)まで、解放センター休館にともない閉室いたします。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分